

今朝は午前 7 時から大阪府立高校に仕事にいった。

いまから書くことは、その高校にいた一時間程度の感想文のようなものだ。

午前 7 時ちょうどから始まったその仕事というのは、園芸用の土を納入する仕事だった。

家庭科の女性教諭と数人の生徒が、校舎裏の余った敷地を利用して、菌ちゃん農法をするための土を納入してきた。

はじめにその女性教諭と校門のところであいさつを交わし、どこにおろすのか、トラックの位置は、ウネをつくる場所は、など簡単に説明をうけた。コミュニケーションはどれもスムーズだった。

途中、校長先生もあいさつに来ていただき、笑顔であいさつをすることができた。校長先生のブログに載せるということで、女性教諭とそのとき隣にいた生徒一人の三人で記念撮影もした。

そのやりとりはどれもさわやかだった。

自分のことしか考えない人間とのやりとりに関して百戦錬磨の川崎はそういう人と話していたらすぐに気づく。

彼らはそういう人じゃなかった。

家庭科の女性教諭もそうだが、この校長先生もしっかりと矢印は他人向きになっていると感じた。

その矢印はおそらく学校の生徒へ向けられているのだろうと思う。

そういうふうにはぼくが感じたのは、生徒たちがけっして楽ではない土おろしの作業を手伝ってくれていたときだ、これから授業を受けなければいけないというのに、汗だくになりながらぼくの作業を手伝ってくれたのだ。

彼らはなんだかんだと話しながら、楽しそうに慣れないショベルを使って働いていた。

そのなかの一人は毎日アルバイトをしていて、自分がいくであろう専門学校の授業料をためているのだそう、コンビニでアルバイトをしていて、夜22時以降は高校生は働くことができないこと、うれしいこともあれば、嫌なお客に辟易することもあることなどを教えてくれた。

もう一人の生徒は控えめの性格なのかなと感じたが、とるべきコミュニケーションは普通に的確にとることができた。けっして派手な性格ではないにもかかわらず、ボクシングをしているのだと教えてくれた。好きでやっているのか誰かにやらされているのかは聞くことができなかったが、かれの大胸筋はたしかにアスリートのものだった。

手伝ってくれている男子生徒二人との共同作業の30分間で、ぼくは心から彼らのことをかわいいなと感じた。ぼくが高校生だった頃、いろいろな人からかわいいねと言われたけど、当時はその気持ちがまったく理解できなかった。

でもいまはその気持ちがよくわかる。

容姿がかわいいとかそんなことではなくて、いろいろな話をしたり聞いたりするあいだに素直さが垣間見えて、その素直さがかわいくてしかたなくなるんじゃないかと思う。

そうやって大人は話しすぎたり、説教じみたことを言ってしまうたりするのかもしれないと感じた。

そう、ここでやってはいけないのが、多くを話しすぎること。コミュニケーションの大半を聞くことにまわさなければいけない。

そこでぼくは今日、彼らに伝えることをふたつに絞った。

▼重いものを持つときどうすれば腰を痛めずに済むか。

▼汗をかいたとき、塩がどれくらい役にたつか。

この二点に絞って、これを説明するときは300文字以上を話すこともあったが、それ以外のときは50文字以内の質問になるように心がけた。

それがうまく伝わったかどうかを確認する方法はもうないが、それを伝えているときの、彼らの笑顔や態度、言葉、その素直さに、ぼくの愛情だけは伝わったんじゃないだろうかと思う。笑

彼らがそんなふうに育っているのは、ひとえに今朝出会った女性教諭や校長先生のように、縁の下で支えてくれている人たちのおかげなのだろうと思う。

社会はこういう人たちで成り立っている。

ぼくは彼らとはまったくちがう場所でまったくちがう仕事をしているが、100年後を生きる子供たちが立つ場所を、下で支える人間でいたいと、改めて考えることができた快晴の1日。杉の木と校舎の間から差し込む太陽はめちゃくちゃ暑いのに、なぜか今日はさわやかに感じた。